

その声音は艶があり、彼も欲情してると如実に伝えてくる。

「も、……っ、早く、……っ」

欲しい、と言葉にはならなかったが、唇の動きで理解したのだから。さらに足を大きく開かされた直後、ひた、と熱が局部に触れた。

「ひ、……ん、んっ、——あ、あ……っ」

少しばかり強引に押し入ってくる熱塊は相変わらず熱くて太い。ひどく苦しいのに、もつと、と思う。繰り返して穿たれ、弱い部分を更に責め立てられるとすすり泣くしかなかった。

痛みはどうになく、あるのは愉悦ばかり。その快樂に身をゆだね、シーツを必死につかんだ。

「あ、……あんっ、——ん……っ！」

目の前が空白に染まり、言葉にならない感覚が支配する。それから少し遅れて、彼が自分の中で果てたのがわかった。どくどくと注がれるその感覚すらも、快樂を呼ぶだけだ。彼が引き抜かれるその感覚もたまらない。

しばらくはお互い無言だった。やがて荒くなっていた息が整い、快樂の代わりに疲労感がやってくる。

臨也は体力があり余っているのか、二度三度と求められることもあったが、あまり体力のない帝人にしてみれば一度で十分だった。

「なんか今日はずいぶん積極的だったよね」
半身を起こし、臨也はからかう口調で告げる。

「そうですか？」

自覚はあったけれど、素知らぬふりをした。

「そうだよ。でもさ、そろそろ俺は飽きて来ちゃったし、もうやめよっか」

言う前に、彼から告げてきた。その終焉を意味する言葉に、安堵する自分がいる。自らではなく、彼から告げてくれて良かったと、そんな風に。そんな自分に自己嫌悪する暇も今はない。

「はい」

こくん。臨也の言葉に了承し、頷く。すると彼がわずかに目を見張った。

「え、いいの？」

「はい。最初から、そういう約束でしたよね。恋人ごっこは臨也さんが飽きるまでって」

「そうだけど」

どうやら臨也にとつて、帝人の了承は予想外だった様子だ。今までは別れを告げてもすんなりと了承してもらえ、ことは少なかったのかもしれない。

けれど、これは予定内の終焉だ。いつか必ず来る目だとわかっていた。

今日、彼が言わなければ帝人から言うつもりもあった。だから、了承以外の言葉は最初から存在しない。

「……っ」

立ち上がろうとして、少しふらつく。

「もう少しゆっくりしていても良いけど？」